

語り手論のために

花 輪 光

物語論 (narratologie) は一般に語り手の類型論をきわめて重視し、大きな場所をそれに与える。どのようなアプローチの方法をとる物語論でも、物語る人物は、いわゆる作者や作中人物とは異なった地位を与えられ、ある特殊な存在と見なされるのが常である。ところで、その語り手の地位に関して、近年きわめて興味ある指摘が Banfield (1973) と Kuroda (1973, 1975) によっておこなわれた。両者の仮説は、文法的には、あらゆる平叙文の深層構造に高次の話し手を想定する Ross (1970) の逐行分析に対する反論としての性格をもつが、これを物語論の枠内でとらえるならば、いわゆる全知の語り手ないし総括的な語り手の否定につながると言うことができよう。フランスの物語論、とりわけ Kuroda と Banfield が念頭においている Barthes, Todorov, Genette の物語論は、明示するにせよ暗に認めるにせよ、物語を一個の文と見なす前提に立っていて、たとえば Barthes (1966, p. 3) は、文が小さな物語であるのと同様、物語は大きな文であると言明している。こうした類推が認められるならば、当然、一個の文の話し手は一個の物語の語り手となるはずであり、Ross の高次の話し手が否定されるかぎりにおいて、物語全体の最終的な語り手も排除されることになる。Banfield と Kuroda の仮説は、二人が等しく認めるように、まだ完全に練り上げられたものではない。しかしそれが、Benveniste (1966) の有名な対立概念 *histoire/discours* を引きつぎ、発展させようとする意図を明らかにしている以上、語り手論は、生成文法の枠から出発して立てられたこれらの仮説を物語論の枠のなかで考えなおす必要があると思われる。本稿は、そのための予備的考察である。

1. 話りの標識

Banfield (1973) も Kuroda (1975) も、物語論に関しては、Barthes, Todorov,

Genette に盛んに言及する。両者とも Barthes, Todorov を引用することから始め、最後の部分で、Banfield は Todorov (1966, 1967) の «abstract effaced narrator» に対して異議をととなえ、Kuroda は *histoire/discours* の対立に関する Genette (1966) の解釈に対して正反対の仮説を提出する。まず、両者が引用する Barthes (1966, p. 18) の一節から見ていこう。

... le récit, comme objet, est l'enjeu d'une communication : il y a un donateur du récit, il y a un destinataire du récit. On le sait, dans la communication linguistique, *je* et *tu* sont absolument présupposés l'un par l'autre ; de la même façon, il ne peut y avoir de récit sans narrateur et sans auditeur (ou lecteur).

Banfield も Kuroda もここに R. Jakobson 流のコミュニケーション・モデルにもとづく物語論——語り手論を見る。たしかに、これは、そうした語り手論の出発点を示す «もっとも率直な» 意見表明であろう。しかし、この一節に関しては時代的な制限を設けて、60年代の語り手論を代表するものと考えなければならない。Banfield や Kuroda が念頭においているフランスの60年代の物語論は、多かれ少なかれ70年代のものとは異なっている。とりわけ70年代の Barthes が、いわゆる *connotation* の概念を足がかりにして、*écriture* や *texte* といった新しい概念の構築に向かい、物語をコミュニケーションの場と見なす考えから脱していくことは周知のとおりである。その兆しはすでに *S/Z* (1970) のつぎのような言葉にも見られる。「Fonctionnellement, la connotation ... altère la pureté de la communication : c'est un "bruit", volontaire, soigneusement élaboré, introduit dans le dialogue fictif de l'auteur et du lecteur, bref une contre-communication (la Littérature est une cacographie intentionnelle)» (p. 15)。Todorov, Genette にも多かれ少なかれ見られるこうした物語論の変化を、ここでは特に考慮せず、主として1966年 (*Communications* 誌の物語論特集) の諸論文を中心にして考えることにする。

Barthes (1966, pp. 19-20) によれば、語り手 (*narrateur*) はあくまでも «être de papier» であり、«signes du narrateur» は物語に内在する。語り手は実在の作者 (*auteur*) と決して同じではない。「*qui parle* (dans le récit) n'est pas *qui écrit* (dans la vie) et *qui écrit* n'est pas *qui est*». Barthes のこの三つのレベル、語り手—作家 (書き手) —作者 (人間) は一般に語り手論に共通するものである。語り手論の出発点は、要するに作者 (人間) と作中人物との間にいくつのレベルを設け、両者の関係をどのように考えるかにある。Banfield と Kuroda が引

用する Todorov (1966, p. 146) は、この点やや曖昧である。

Le narrateur, c'est le sujet de cette énonciation que représente un livre. Tous les procédés que nous avons traités nous ramènent à ce sujet. C'est lui qui dispose certaines descriptions avant les autres, bien que celles-ci les précèdent dans le temps de l'histoire. C'est lui qui nous fait voir l'action par les yeux de tel ou tel personnage, ou bien par ses propres yeux, sans qu'il lui soit pour autant nécessaire d'apparaître sur scène. C'est lui, enfin, qui choisit de nous rapporter telle péripétie à travers le dialogue de deux personnages ou bien par une description 'objective'. Nous avons donc une quantité de renseignements sur lui, qui devraient nous permettre de le saisir, de le situer avec précision; mais cette image fugitive ne laisse pas approcher et elle revêt constamment des masques contradictoires, allant de celle d'un auteur en chair et en os à celle d'un personnage quelconque.

Banfield は、この一節に見られるようにあまりにも高いレベルで考えられた抽象的な語り手を批判し、これではもはや現実の作者(人間)との区別がつかず、たとえば演劇と小説との伝統的な区別さえ失われる (Todorov は書簡体小説 *Les Liaisons dangereuses* にさえ総括的な語り手を認める) だけでなく、Todorov が拠っている内在分析の立場から逸脱することになるろうという。たしかに、引用の第一行、「sujet de cette énonciation que présente un livre」としての語り手は、「auteur en chair et en os」に等しいと読みとられかねないが、しかし「masque」という比喩からもわかるように、実在の作者(人間)との混同を意味しないことは言うまでもない。Banfield の指摘を待つまでもなく物語の内在分析の立場からすれば、こうした語り手と作者(人間)との連続性は論外である。

しかし、語り手と作家(書き手)との関係はどうか(語り手と作中人物との関係はおのずから明瞭であろう)。この点については Todorov の用語法に曖昧さが含まれていて、ときに混乱を招いているという印象は否定できない。少なくとも Todorov (1966, 1967) は、語り手と作家(書き手)を区別していないように見える。彼はあるときは同義に扱い («certaines interventions de l'auteur-narrateur», 1967, p. 42), あるときは区別する («l'image du narrateur, image prise parfois pour celle de l'auteur lui-même», 1967, p. 86)。したがって、引用中に言う、語り手についての «renseignements» なるものは、きわめて幅が広くなり、テキストから得られるかぎりでのそれではなくなるような印象を与える。たとえば、物語の叙述の順序を決める人物 («lui qui dispose certains

descriptions avant les autres») をも語り手と呼ぶべきであろうか。また、「niveau appréciatif」(1966, p. 146) に現われる像までも語り手の像と考えるべきであろうか。

少なくともここでは、後に Todorov (1968, p. 64 以下) が明確にしているように、テキストの直接的な構成要素によって指示されるかぎりでの語り手 (narrateur)、「sujet de l'énonciation énoncé」と、その上位のレベルに位置づけられる作者(作家、書き手)または «auteur implicite» とを区別しておく必要がある。この後者は常に «innommable» (1968, p. 65) であって、標識をもたない。これに対して、あるテキストの語り手とは、「éléments verbaux」から出発して再構成される想像上の話し手 (Todorov, 1972, p. 410) にほかならない。

Todorov (1966, 1967) の narrateur effacé = auteur implicite に対する Banfield (1973) の批判は、もっぱらその無標識性に向けられていると言える。彼女はテキストの語り手 (narrator) = 文の話し手 (speaker) を前提として、一人称代名詞 (直接話法の場合を除く) または何らかの «linguistic signs of the speaker (expressive constructions, evaluative words, etc.)» をもたないテキストは語り手をもたないとする (pp. 34-35)。Todorov の «abstract effaced narrator» に代わる彼女の語り手は、それゆえ、一人称代名詞とそれに結びつく «expressive or evaluative language» (p. 38) によって特徴づけられる。われわれはこうした «signes du narrateur» (Barthes), 語り手を指示する «éléments verbaux» (Todorov), «linguistic signs of the speaker» (Banfield) を «語りの標識」と呼ぶことにする。

2. reportive/nonreportive

語り手をもたない物語という考えはすでに Benveniste (1966) によって提出された。その有名な対立概念 discours/histoire によれば、histoire は «présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit» であって、この型の叙述からはあらゆる «forme linguistique “autobiographique”» が排除される (p. 239)。その結果、もはや語り手は存在せず、「les événements semblent se raconter eux-mêmes» (p. 241)。

Kuroda (1973) の reportive/nonreportive の対立も、物語が語り手の

《report》であるか否かを規準にするという意味では、discours/histoire の対立に相当する。彼によれば、一人称の物語および《neutral or effaced narrator》による三人称の物語は reportive である。言いかえれば、物語が《narrator who may be omnipresent but not omniscient》によって語られるならば reportive であり、その他の場合は nonreportive である (p. 383)。ところで、語り手によって媒介されていないはずのこの nonreportive style の物語に対しても、語り手を認める立場がある。それが omniscient narrator theory である (Kuroda はこの説に反対して multi-consciousness theory をとる)。しかし、Kuroda によれば、この《全知の語り手》(omniscient narrator) の《まやかしの》性格は、たとえば以下のような意味論的考察 (pp.338-339) によっても立証することができるという。

まず、つぎの三つの文を比べてみよう。

- (1) Yamadera no kane o kiite, Mary wa kanasikatta.
- (2) Yamadera no kane o kiite, Mary wa kanasigatta.
- (3) Yamadera no kane o kiite, Mary wa kanasikatta no da.

(2) や (3) は意味論的にある意識の主体 (subject of consciousness) を指し示す。これらの文がその意識の主体の判断を表わすと解せられるのは、《gatta》や《no da》の意味効果による。これらの文の場合、判断の主体、意識の主体はもちろんこの文の話し手 (speaker) であるが、これらの文が一人称の物語のなかに現われるならば、当然、それは“*I*”、すなわち語り手となり、また、三人称の語り手が明示されている物語なら、その語り手ということになる。

しかし、さきほど見た《neutral or effaced narrator》による三人称の物語の場合はどうか。つまり、reportive style の物語において、語り手が明確に同定しえないほど《effaced》されたときはどうか。その場合にも、(2)や(3)のような文が現われるならば、その決定的な《referential force》は語り手を指すことをやめない。言いかえれば、語り手は《mechanism of reference in grammar》によって指示されるのであって、認識論的な仮説にもとづいてその存在が指定されるわけではない。

他方、nonreportive style の物語にしか現われえない(1)のような文は、こうした意識の主体を指し示す《referential force》をもっていない。この場合にもなお、(1)の文は誰かの判断、全知の語り手 (omniscient narrator) のそれを表わしていると思えずことはできよう。だが、その場合、全知の語り手は《lin-

guistic mechanism」によって同定しえない。言いかえれば、全知の語り手は reportive style における語り手のような «linguistic basis» をもっていないのである。したがって、Kuroda の reportive/nonreportive の対立に見られる語り手の規準もまた、Benveniste や Banfield と同様、語り手を示す何らかの言語標識 (linguistic mechanism) の有無なのである。

3. histoire の積極的特徴

Kuroda (1975, p. 268) によれば、Benveniste の histoire/discours の対立は物語の理論に《有意義な》影響をおよぼさなかったように見えるが、それは histoire が本質的に消極的な用語によって特徴づけられているためであるという。物語論に対する影響が《有意義》であったかどうかはさておき、この後半の指摘はまったく正しいと思われる。少なくとも Benveniste (1966) は instance de discours を指し示す要素、いわゆる shifter を中心にした言語要素の欠如によって、histoire を定義している。そこで Kuroda (1975) は、K. Hamburger (*Die Logik der Dichtung*, 1968) を援用しつつ、Benveniste の histoire 概念を四つの《積極的指標》(p. 270) によって特徴づけようとする。

まず、Hamburger の対立概念 Erzählen/Aussage (Kuroda によればこれは本質的に histoire/discours に対応する) を特徴づける三つの《言語特徴》として、① 心理過程を表わす動詞が三人称で用いられる場合の問題 (さきほど Kuroda の例文で見た kanasii, kanasigaru のような感情を表わす日本語の用法もこの部類に入る)、② erlebte Rede (style indirect libre)、③ 物語における過去時称は時制としての意味(過去性)を失っているという問題、それにさらに Kuroda 自身が挙げる第四の特徴、日本語の zibun の用法が示すような nonreportive style の問題である。

この四つの特徴をここで検討するつもりはない。ただ、第二の項目に挙げられた style indirect libre (以下 SIL と省略) について見ていくことにする。この問題は文体論によって盛んに論じられてきたが、ここではもっぱら語りの標識について眺めるのは言うまでもない。Benveniste (1966, p. 242) は、histoire と discours が結びついた第三の言表作用の型があると述べるにとどまり、この中間的な型については説明していない。ところで、従来の文体論、小説論は SIL を、作中人物と語り手(ないし作者)の声が微妙に混じりあう話法であるとしてきた。たとえば、Kuroda (1973, p. 390) が引用する D. Cohn (1966, p.

104)の一節はその端的な例である。

erlebte Rede is somewhere between direct and indirect discourse, more oblique than the former, less oblique than the latter. In searching for a better English label, I hesitate between "narrated consciousness" and "narrated monologue"; the second term in both these phrases expresses the immediacy of the inner voice we hear, whereas the first term expresses the essential fact that the narrator, not a character in the novel, relays this voice to us...

しかし Kuroda (1975)によれば、*erlebte Rede* (SIL) は、ある作中人物の内心の考えや感情を直接的に示す手段であって (p. 271)、語り手の声は排除される。Banfield (1973, p. 33) が SIL に認めるのもこのモノローグ性である («There is no *I* and *You* in free indirect speech»). SIL が作中人物の考えや感情を直接的に示すというのは、まさしく Kuroda (1975, p. 263) が揶揄する «全知の語り手」と同様、«*convention littéraire*»の一つにすぎないと思われるが、これは問わないことにしよう。また、文の話し手とテキストの語り手を等しいものと見なす Banfield の前提についても問わないことにしよう。しかしそれでもなお、書きことばに固有の SIL に現われる «*linguistic signs of speaker*» (p. 34)、«*expressive or evaluative language*» (p. 38)の問題は、それほど単純明快に処理できるものであろうか。

たとえば、Banfield (pp. 29-30) は SIL が直接話法、間接話法から派生しえないことを示したのち、SIL を形式的に説明するためには、1E/1I の原則をより基本的なつぎの原則に分解する必要があるとする。

- (1) *The 1E / 1 Consciousness Principle.* For every node E(xpression), there is a unique referent, called the subject-of-consciousness, to whom all expressive elements are attributed.
- (2) If there is an *I*, *I* is the subject-of-consciousness.

しかし、実際に彼女が適用例として挙げる文学テキストを見ると、いくつかの疑問が湧いてこずにはいない。たとえば、彼女がみずから SIL の例と認める (p. 12) D. H. Lawrence の短編 *England, My England* のつぎの一節を見よう。ここでは «*expressive element*» がすべて、唯一の意識の主体に関係づけられると言えるであろうか。

Was there blood on his face? Was hot blood flowing? Or was it dry blood congealing down his cheek? It took him hours even to ask

the question : time being no more than an agony in darkness, without measurement.

A long time after he had opened his eyes he realized he was seeing something—something, something, but the effort to recall was too great. No, no ; no recall !

この一節について彼女は、およそつぎのような注釈をつけ加える。すなわちこの一節は直接話法の標識——特に *inverted questions, expressive exclamations, incomplete sentences* によって特徴づけられているが、読者はこれが直接話法ではないと感じる。それは単に引用符が欠けているからではない。読者は《No, no》のような *exclamation* を、この場面を描いている *effaced narrator* のものとはせず、代名詞 *he* によって指示される人物に帰属させる。そうした読者の直観を確証するのは、《It took him hours even to ask the question》という文である。この文によって、最初の三つの疑問文は、目に見えない（一人称の）語り手ではなく、代名詞 *he* の指向対象によって発せられていることが明らかになるという。

しかし、われわれの直観によれば、そうは思われぬ。この一節の第二パラグラフは、《彼》が負傷して、もはや意識も定かでないことを告げている。そのような《彼》に最初の三つの疑問文を帰せしめることができるであろうか。Banfield 自身、もっと先のほうでは、この点についてつぎのように言っている。《we are not forced by the line ‘It took him hours even to ask the question’ to imagine that the character who ponders the three preceding questions has been trying for hours to enunciate or visualize these very words》(p. 29)。だが、それならば、負傷した《彼》のかたわらにいて、それが血であるかどうか、流れ出す熱い血か、それとも凝固した血であるのかを、このような形で問うているのは誰であろうか。

Banfield (p. 35) によれば、SIL を用いるテキストがある語り手(彼女の言う *unique narrator* ではない)を除外する形式的理由はないと思われるし、事実、*England, My England* には語り手がいるという。なぜなら、この短編にあっては、どの作中人物にも帰しえない *evaluative word* (たとえば, *Poor Joyce*) やつぎのような感嘆文(これは語り手によってしか発しえない)が現われるからである。

But—but—oh, the awful looming cloud of that *but!*—he did not stand firm in the landscape of her life like a tower of strength . . .

そして Banfield は、この語り手を《effaced narrator》と呼ぶことができるという。なぜなら、直接話法の部分を除けば、一人称代名詞はこの短編の題名 (*England, My England*) に現われるだけだからである。だが、彼女によれば、これは abstract narrator ではない。この effaced narrator の存在は表層構造によって経験的に決定されるからである。

してみると、さきほどの三つの疑問文は、この effaced narrator のものであるか。しかしそれなら、この部分は、彼女が言う SIL ではなくなる。しかしまた彼女が言うように、彼がこのとおりのことばで問いを發したわけではないとするなら、彼の問いがこのような形をとるためには、まさしく語り手の媒介を必要としたのではなかろうか。いずれにせよ、「彼」のものでもあり《語り手》のものでもありうるというこの解釈 (p. 29) は、彼女が主張する SIL のモノログ性に抵触するように思われる。もし SIL が部分的にせよ声の二重性を許容するというのであれば、effaced narrator が unique narrator にならない保証はどこにあるのであろうか。

われわれはここでもう一つの疑問——SIL の境界画定の問題にぶつかる。SIL の判定に曖昧さがつきまとうことは、多くの論者が一様に認めるところである。各言語における SIL の形態上の相違は十分に考慮しなければならないが、Kuroda (1975, p. 272) は erlebte Rede を SIL に相当するもの (p. 271) とした上で、文学テキストにおける erlebte Rede は、意味論的ないし文学的解釈をおこなう場合、その境界の画定が難しいことを率直に認めている。しかも他方、いかなる《signe linguistique》によっても保証されない SIL、つまり situation ないし contexte のみに由来する SIL (Bally が figure de pensée と呼ぶもの) が存在する (Verschoor, 1959, p. 38) とすれば、逆に、いわゆる地の文もまたある種の条件のもとでは figure de pensée によってある主観性を表わしうることになる。あとで見ると、SIL とそれが挿入される地の文との境界を明確に限定できないということは、語りの標識をもたないはずの non-expressive な文にも、意識の主体が認められる可能性のあることを示す。だが、その主体と SIL の意識の主体とが弁別できないとすれば、Todorov (1967, p. 42) が *Liaisons dangereuses* の手紙の配列の仕方(さらに一般的には、物語の出来事の叙述の順序)に narrateur-auteur implicite の(文法的標識を欠いた)存在を認めたとしても、非難することはできないであろう。

4. SIL と histoire

Banfield に対するさらに重大な疑問は、SIL の挿入の条件に関するものである。彼女によれば *histoire* または *nonexpressive (nonreportive) style* は「unique narrator」を排除することを可能にし、しかも SIL はこの種の style にしか挿入されず、そして事実、SIL を含む多くの小説にあっては、こうした *nonexpressive style* が見られるという (p. 36)。しかし、この種の文体は本当に語りの標識を欠いた純粋な状態で存在するのであろうか。

たとえば、すでに引用した *England, My England* の一節に続く地の文(引用の二つ前のパラグラフ)を見よう。

After a time he seemed to wake up again, and waking, to know that he was at the front, and that he was killed. He did not open his eyes. Light was not yet his. The clanging pain in his head rang out the rest of his consciousness. So he lapsed away from consciousness, in unutterable sick abandon of life.

動詞 *seemed* が指し示す意識の主体は言うまでもなく語り手である。これを「彼」に帰すことは不可能であり、彼のほかには語り手しかない。語り手は外部から彼を眺め、断定を差し控えている。つぎの文においても、語り手は外部から事態を確認する。そのつぎの文はやや曖昧であるが、前後の文脈からして「彼のもの」となっていない「光」とは、彼が感じる光であろう。したがって、語り手はすでに彼の内部にいる。つぎの文では、語り手はさらに深く彼の意識のなかに入りこむ。頭のなかの痛みを *clanging* と感じているのは、もちろん彼であって語り手ではない。しかしこの文の後半は、痛みの意識が他の意識を「追い出していった」または「追い出してしまった」ことを告げている。前者の場合は彼の反省的意識がこの事態をとらえる余地があるが、後者の場合は語り手の意識が必要となろう。so という語によって最後の文をこの文に関連づけるのは、言うまでもなく語り手である。明らかな語りの標識(*seemed, so*)をもつこの style が *nonexpressive (nonreportive) style* であろうか。というのも、Banfield (1973, pp. 35-36) は、つぎのように言っているからである。

Of course according to the notion that the narrator is the principal speaker (subject-consciousness) in a text, even a single instance of the first-person pronoun or expressive elements outside of direct speech

implies a narrator. But the free indirect style frequently occurs in texts where no first-person narrator explicitly appears.

Banfield (p. 36) はこうも言っている。つまり、「expressive elements」をもたない SIL の導入節は nonexpressive であり、一人称代名詞と «evaluative terms» を欠くから «nonreportive» と呼ぶことが可能であり、Benveniste の «style historique» (=histoire) の定義にかなっているという。では、その Benveniste の例 (Balzac の *Gambara* の一節) を検討してみよう。

Après un tour de galerie, le jeune homme regarda tour à tour le ciel et sa montre, fit un geste d'impatience, entra dans un bureau de tabac, y alluma un cigare, se posa devant une glace, et jeta un regard sur son costume, *un peu plus riche que ne le permettent*⁽¹⁾ *en France les lois du goût*. Il rajusta son col et son gilet de velours noir sur lequel se croisait plusieurs fois *une de ces grosses chaînes d'or fabriquées à Gênes*; puis, après avoir jeté par un seul mouvement sur son épaule gauche son manteau doublé de velours en le drapant *avec élégance*, il reprit sa promenade sans se laisser distraire par les œillades bourgeoises qu'il recevait. Quand les boutiques commencèrent à s'illuminer et que la nuit lui parut assez noire, il se dirigea vers la place du Palais-Royal *en homme qui craignait d'être reconnu, car il côtoya la place jusqu'à la fontaine, pour gagner à l'abri des fiacres l'entrée de la rue Froidmanteau*... (イタリックは筆者)

原注 (1) Réflexion de l'auteur qui échappe au plan du récit.

まず、「un peu plus riche que ne le permettent en France les lois du goût」は、Benveniste の原注にあるとおり、histoire の次元を逸脱する「作者」(われわれによれば語り手)の考察である(このことは、比較を含む価値判断、普遍的事実を表わす動詞現在形からして明らかである)。しかし、これを除けば、この一節は histoire の条件を満たすであろうか。そうは思われない。まず、指示形容詞 «ces» を含む «une de ces chaînes d'or fabriquées à Gênes» は、この «ces» によって読者に呼びかけ、暗黙の了解を求めている語り手を予想する。それに «fabriquées» という過去分詞は、「que l'on fabriquait」と同義ではなく、「que l'on fabrique」と解されるかぎりにおいては、語り手の現在を指し示す表現であって、histoire に属さないと言うことができよう。つぎに、副詞句 «avec élégance» は、明らかに語り手の評価を含んでいる。さらにまた、「en homme qui craignait d'être reconnu」は、比較ないし推測をおこなっているあ

る意識の主体を示す。そして最後に «car il côtoya la place» 以下は、そうした判断に達した意識の主体の推論ないし理由づけを示すものである。

これらの語りの標識はすべて、Benveniste (1966, p. 241) が *histoire* に無縁なものとして挙げた «discours, réflexions, comparaisons» などに相当する。しかもまた、この当時は *histoire/discours* の差異をもっぱら *shifter* にかぎって考察したのに対して、その後の Benveniste (1974) は *deixis* の範囲をさらに広げて考えているということを出すなら、*histoire* の純粹さを保つことがいかに困難であり、SIL の周辺に語りの標識が現われる場合がいかに多いかが察しられよう。

5. 語り と 視 点

Kuroda (1975, pp. 2672-68) は物語技法の史的側面に触れ、現代の批評精神になじまない語り手の全知性は次第に制限されてきているとする。Banfield (1973) はもっと具体的に、物語様式の歴史は 1 Text/1 Narrator の制約による視点の制限を克服し、*unique narrator* を排除するためのさまざまな企てとして記述できる (p. 38) と主張する。彼女によれば、SIL を用いた小説にあっては、*nonexpressive style* (*nonreportive style*) が H. James 流の限定視点を実現し、*unique narrator* の特権的なパースペクティブを排除する (p. 37) という。言うまでもなく、いわゆる全知の語り手に代わって、限定された視点をとる語り手が登場してくることは歴史的な事実である。しかしまた、今日の物語論にとっては、「視点」と称されてきたものと語りの問題とを区別する必要があることもまた事実であろう。

Kuroda (1973, p. 383, note 12; 1975, P.293, note 1) は、語り手の観念の解明と視点の問題とは別個の研究を必要とすると断っているにもかかわらず、この点を十分考慮していないように思われる。たとえば、Kuroda (1973, p. 382) が引用する D. H. Lawrence (*Sons and Lovers*, chap. VII) の一節を見よう。

Paul looked into Miriam's eyes. She was pale and expectant with wonder, her lips were parted, and her dark eyes lay open to him. His look seemed to travel down into her. Her soul quivered. It was the communion she wanted. He turned aside, as if pained. He turned to the bush.

この一節について Kuroda (1975, P. 382) は、およそ以下のような解釈をお

こなう。すなわち、ここには Paul と Miriam の視点、それにおそらく語り手の視点もまた含まれていて、この三つは必ずしも明確に区別されず、むしろ微妙に混じりあっている。最初の文は語り手の視点を表わすと見ることができるが、しかしまた、Miriam に向けられた Paul の意識を表わすと見こともできる。つぎの文は Paul の心に映った Miriam の姿を表わす。3~5 の文は自分自身に向けられた Miriam の意識。つぎの文から最後の文にかけては、Miriam の意識が消えていき、語り手の視点かもどってきて、最後の文は語り手の「indifferent」な視点を表わすという。

こうした視点の解釈を許すものは何だろうか。ここで詳細に検討する用意はないが、少なくとも Kuroda の《全知の語り手》は語りの文法的標識をもち、ただ視点に関しては作中人物の内面を知りうる能力によって特徴づけられるということを思いおこそう。この《全知性》は一般に言われるところの全知性よりも制限されている (Kuroda, 1973, p. 383, note 12) が、それは目下の問題ではない。とにかく Kuroda が批判するのは、もっぱら作中人物の心理を直接知りうる語り手の超人間的能力であり (1975, p. 267)、また、その語り手の無標識性である (これについてはすでに 2 で見た)。たとえば、すでに挙げた nonreportive な例文、《Yamadera no kane o kiite, Mary wa kanasikatta》は、語りの標識をもち、三人称主語の視点に立った《全知の語り手》によって語られている (pp. 383-384) と考えることができる。

これに対して、reportive な文、《Yamadera no kane o kiite, Mary wa kanasikatta no da》は、語りの標識 (no da) をもち、《omnipresent》ではあっても《omniscient》ではない effaced narrator (p. 384) によって語られている。

したがって、引用の一節について、ある意識の主体を指し示す語句と、作中人物の内面にかかわりをもつ表現を見なければならぬ。まず、3~5 の文が (他の文とちがって) Miriam の視点だけに結びつけられるのは、おそらく *seemed, soul, wanted, etc.* のためであろう。これらの語句が関係づけられうる意識の主体は、彼女をおいて他にないと思われる (動詞 *seemed* の感じ手は彼女以外になく、彼女の魂の動きを知り、彼女が欲していたことを知っているのは彼女だけである)。もちろん、《全知の語り手》を想定すれば、これらの文も他のすべての文と同様、その語り手に帰することができるが、その場合は、*seemed, as if pained* のような語句は逆に《全知性》になじまなくなる (《全知の語り手》が故意に推測的な語り方をしていると解釈することはできるが)。同様に、*expectant with wonder, as if pained* は、ある判断、推測の主体

を示す referential force をもつ。しかし、前者(第二の文)は Paul を、後者(第六の文)は Miriam を、そうした主体とすることによって説明できる。そのかぎりにおいては、語りの標識は現われない。いっぽう、この一節に《おそらく》現われていると Kuroda が言う語り手の視点は、すべて外部のそれである(第一の文、最後の文)。Kuroda は最後の文だけを語り手固有のものとしているが、Kuroda (1975, p. 274) の表現を借りるならば、この文は視点に関して《neutre》であり、ある意識の主体を予想しない。この文を語り手に帰するにあたって、Kuroda がことさら《indifferent》な視点と形容しているのもゆえなしとしない。

いずれにせよ Kuroda (1973, p. 382) の解釈によれば、この一節は《structured collection of information from various subjects of consciousness》であり、そうした意識の主体の一人がこの最後の文の語り手ということになる(これが彼の言う multi-consciousness theory の語り手である)。この型の語り手は、《全知の語り手》と同様、物語のなかで指示(refer to)されず(p. 382), nonreportive style の物語に関係する(p. 383, p. 387)。つまり、どちらも語りの標識をもたない。それゆえ、両者を区別するのは語りの標識の有無ではなくて視点(内か外か)である。何らかの標識をもてば、この後者の語り手は effaced narrator (遍在するが全知ではない)となる(p. 383)。

しかし、語りの標識の欠如を前提とした、視点(内か外か)だけによる区別は、論理的に可能であっても現実的であるとは思われない。物語全体を通じて語り手の存在が作中人物の視点のうちに解消され、語りの標識が消えてしまうことはおそくないのである。たとえば、さきほどの語り手は、およそ二ページ前の部分で、Paul とその母親についてつぎのように語っている。

They were both very happy so, and both unconscious of it. These times, that meant so much, and which were real living, they almost ignored.

これは語りの標識(unconscious, almost ignored)をもった《全知の語り手》にほかならない。彼は二人が意識しなかったことさえ知っており、ほとんど気にしなかったことも知っている。実際、Kuroda の考えとはちがって、《全知性》(内側の視点)と語りの標識の欠如を結びつける必然性は少しもないように思われる。いわゆる視点に関して語りの標識を考えるためには、少なくとも固有の意味での視点(内/外/内と外または視点ゼロ)に加えて、語り手(N)と作

中人物 (P) の《知識の量》の関係 ($N > P$, $N = P$, $N < P$) を見なければならぬ。一般に全知の語り手と称されるものは《視点ゼロ》、 $N > P$ の関係によって特徴づけられるが、Kuroda のそれは《内》、 $N = P$ に近く、multiconsciousness theory の語り手は《外》、 $N = P$, effaced narrator は《外》、 $N = P$ または $N < P$ によって表わされるように思われる。(もしそうであるとすれば、《全知の語り手》を否定し multi-consciousness theory をとるべきであるとする Kuroda の主張は、物語論—語り手論に対してどれだけの意義をもつか疑問である。この仮説は語り手論の全領域に適用されるものではないからである。)

さらに、視点の移動という観点から見ると、Lawrence のさきほどの一節は、Kuroda も認めるように視点の移動を伴うから、Genette (1972, p. 207) の言う focalisation interne variable (たとえば、*Madame Bovary*) に相当する (これに対して James 流のいわゆる限定視点、たとえば、*The Ambassadors* は focalisation interne fixe である)。Kuroda の multi-consciousness theory なるものは、こうした視点のとり方を徹底させたものと見ることができ、しかし一般に focalisation interne variable はある作品全体に厳密に適用できるものではない (たとえば *Bovary* の有名な辻馬車の場面は focalisation externe であり、第二部の冒頭における Yonville の叙述は、もはや focalisé されていない)。さきほどの例にも見られるように、視点の移動は不明確になり、視点の有無 (focalisé/non focalisé) は区別しがたくなる。それは Kuroda (1975, p. 265, note 2) が言うように、Lawrence の文体が視点に関して《subtilité exquise》をもつからではなく、またそれが逐行分析によって処理しがたい文体であるからでもなく、むしろ彼自身の言う《視点》(あるいは一般に言うところの視点) の概念の曖昧さによる。たとえば Kuroda (1973, p. 386) は、他の作家の物語の一節について、さまざまな視点の解釈が可能であることを認め、《物語の他の部分またはもっと間接的な出所》から得られる情報がなければ、どれが自然な解釈かを言うことはできないとしている。視点は語りの標識と密接な関係をもつが、視点の分析だけによって語りの標識を見出すことはできないのである。

Barthes (1966, p. 20) は、このような場合に有効な判定規準として、一人称による書き換えを提案している。これは Kuroda (1973, p. 384) が示唆するように、reportive/nonreportive の判定にも適用できそうであり、少なくとも意識の主体にかかわりをもつ文の成分を明らかにする役に立ちそうである。たとえば、*«il aperçut un homme d'une cinquantaine d'années, d'allure encore*

jeune, etc.》という文があるとする。これは《Moi, j'aperçus, etc.》という書き換えを許すから、Barthes の言う *systèmes personnel/a-personnel* のうち、前者に属することがわかるが、《le tintement de la glace contre le verre sembla donner à Bond une brusque inspiration》は、sembler という動詞のゆえに書き換えることができず、a-personnel の体系に属することがわかる（動詞 sembler は a-personnel の記号である）。Barthes (1966, p. 20) によれば、personnel/a-personnel の対立は Benveniste の discours/histoire に対応するものであり、système personnel を定義するのは、語りが発話行為 (locution) の《ここ》と《いま》に関連づけられていることであるという。したがって、système personnel は明らかに Benveniste の discours に相当するはずであるが、しかし Barthes の二分法は視点に関係する範疇化であって、instance de discours に関係する語りの標識を示すものではない。たとえば、Barthes が挙げるつぎの例を見よう。

Ses yeux	personnel
gris-bleu	a-personnel
étaient fixés sur ceux de Du Pont <i>qui ne savait quelle</i>	
<i>contenance prendre</i>	personnel
<i>car ce regard fixe comportait un mélange de candeur,</i>	
<i>d'ironie et d'auto-dépréciation.</i> (イタリックは筆者)	a-personnel

視点 (personnel/a-personnel) の問題との関連で、語りの標識が見られるとしたら、それは car 以下の部分であろう。この理由づけは明らかに《彼》(ses) にも Du Pont にも帰することができない。それに先立つ関係節 (qui 以下) は曖昧である。Barthes はこれを《彼》の視点に属するもの (personnel) と見るが、car 以下の部分との関連で考えるならば、語り手の視点に属すると見ることもできる。要するに personnel/a-personnel の対立は、ある意識の主体を中心に (je による書き換え)、文または文の成分がその主体に関係づけられるか否かを言うだけであって、a-personnel の部分が他のどの主体 (ここでは Du Pont, 語り手) に関係づけられるかは言わないのである。

繰り返して言えば、語りの標識の有無 (reportive/nonreportive) と視点 (omniscient narrator theory/multi-consciousness theory) との関係はそれぞれの系列に属する特徴の組合せにもとづき別個に考慮しなければならない。Kuroda (1975, p. 266) は、逐行分析にならって語り手の問題を考えるならば、一般に三人称の物語のあらゆる文は三つの部分に分かれるという。すなわち、

① 逐行的な部分: *je* (le narrateur) *affirme, dit (etc.) à toi* (le lecteur), ② 視点を表わす部分: *il/elle dit, pensait, sentait (etc.)*, ③ 命題内容の部分、である。この図式(これは一人称の物語にも妥当する——もちろん ② の部分の主語は *je* になる——とわれわれは考える)を借りて言えば、② の部分(視点)が《全知》(《内》)か、《限定》(fixe)されているか、等々は、原則として ① の部分の指標の有無とは別問題なのである。たとえば、限定視点の模範と言われる James の *The Ambassadors* に語り手の存在を示す指標が多々あることはまぎれもない事実であり (Vitoux, 1975, p. 463 以下)、また、《神の如く遍在する》ことを目指した Flaubert の *L'Education sentimentale* は focalisation interne variable によって物語られているが、ここにも語りの標識が何十となく見出される (Bruneau, 1976)。実際の観点から見るならば、語りの標識の欠如を前提とする Kuroda の《全知の語り手》否定論 (multi-consciousness theory) はかつて《限定視点》の説がそうであったように、一つの美学的要請にすぎないように思われてくるが、これは速断であろうか。

6. histoire < discours か histoire > discours か

すでに述べたように、Kuroda (1976, p. 268) によれば、Benveniste の範疇化 (histoire/discours) は物語論に対して《有意義な》影響を残さなかったという。では、どのように受けとられたのか。この間の事情を Todorov と Genette について見よう。

Todorov がこの二分法を《乱用》または《転用》して、いわば物語の内容 (histoire)/ 表現 (discours) の対立に置き換えたことは周知のとおりである。そしてこの対立は、用語こそちがっても多くの物語論で援用され、Genette もこれを引きついでいる。

Todorov は Benveniste (1966) の書評 (1966 年、*Critique* 誌 8-9 月号) をおこなった際、すでにこの二分法をロシアのフォルマリストたちの二分法、*fable* (ce qui s'est vraiment passé)/ *sujet* (comment nous l'avons appris) に対応させ、つぎのように言っている。「La “fable” ou l'histoire correspond à cette réalité que le livre évoque ... la même histoire pourrait nous être racontée de différentes façons. Le “sujet”, ou le discours, correspond à un discours concret : celui du narrateur» (p. 760)。Todorov (1966, p. 126-127) はこの区別を引きつぎ、histoire は物語 (作品) が喚起する《une certaine réalité》であ

り、discours は語り手がそれを伝えるやり方であるとする。したがって、あらゆる物語に語り手を認める Todorov は、Benveniste とまったくちがった立場に立っているわけである。

しかし、この《乱用》は誤解にもとづくというよりも意図的なものであろう(彼は1970年3月の *Langages* 誌の論文では *histoire* を正しく位置づけている)。そしてこの転用を可能にしたのは、まさに *histoire* が *instance de discours* を指示する言語要素の欠如によって特徴づけられているという事実であろう。言いかえれば、*histoire/discours* の対立は 語りの標識の有無に還元しようということである。Todorov (1966, p. 145) は当時つぎのように考えていた。

Toute parole est, on le sait, à la fois un énoncé et une énonciation. En tant qu'énoncé, elle se rapporte au sujet de l'énoncé et reste donc objective. En tant qu'énonciation, elle se rapporte au sujet de l'énonciation et garde un aspect subjectif car elle représente dans chaque cas un acte accompli par ce sujet. Toute phrase présente ces deux aspects mais à des degrés différents ; certaines parties du discours ont pour seule fonction de transmettre cette subjectivité (les pronoms personnels et démonstratifs, les temps du verbe, certains verbes ; cf. E. Benveniste «De la subjectivité dans le langage», dans *Problèmes de linguistique générale*), d'autres concernent avant tout la réalité objective.

言語機能を指向的 (référentiel) なものと表現的 (expressif, émotif) なものとに還元するこの考え方からすれば、《aspect subjectif》の構成要素を排除することによって得られる純粋な *histoire* とは、とりもなおさず物語の指向対象 (réalité fictive) である。しかし、その逆を考えるわけにはいかない。物語にとってより本質的な《aspect objectif》を消去することは不可能であろう。Kuroda (1975, p. 282) が Todorov の *histoire* 概念に言及し、強調するのは物語言語におけるこの指向作用 (《fonction objective》) の優位性である。彼によれば、《それは物語理論の根拠を検討してみるまでもなく決定しよう》ことなのである。Kuroda (1975, p. 292) はここから出発して Benveniste の *histoire* の (*discours* に対する) 優位性を主張し、*histoire* がそのアンチテーゼとしての *discours* を止揚すると考える (《La fonction objective... est la base sur laquelle les antithèses *Erzählen* et *Aussage* ou *histoire* et *discours*, atteignent leur synthèse conceptuelle》)。彼が Genette (1966) と対立するのは、この点においてである。

Genette (1966) は Todorov と同じ時期にすでに *histoire/discours* について重大な指摘をおこなっている。つまり、*histoire* と *discours* の «dissymétrie»

(p. 162) の問題である。

Genette の指摘は二つの点に要約できよう。① *histoire* は *discours* よりも純粹さを保つことがはるかに困難であり、② 常に *discours* に包括されるが、その逆は不可能である。この ① の点についてはすでに見た。これから見ていくのは ② の点である(ついでに言えば、これはいわゆる「詞」と「辞」の対立において、主体的表現が客体的表現を風呂敷型に包み込む関係である)。

たとえば、Chateaubriand の *Mémoires d'outre-tombe* (第一巻第五章) を読んでいて、つぎのような一節に出会ったとしよう。

Lorsque la mer était haute et qu'il y avait tempête, la vague, fouettée au pied du château, du côté de la grande grève, jaillissait jusqu'aux grandes tours. A vingt pieds d'élévation au-dessus de la base d'une de ces tours, régnait un parapet en granit, étroit et glissant, incliné, par lequel on communiquait au ravelin qui défendait le fossé : il s'agissait de saisir l'instant entre deux vagues, de franchir l'endroit périlleux avant que le flot se brisât et couvrit la tour . . .

この一節を見るかぎりにおいては、Benveniste の *histoire* の条件が完全に満たされていて、語り手(語りの標識)は見当らない。しかしそのあとに、「*Pas un de nous ne se refusait à l'aventure, mais j'ai vu des enfants pâlir avant de la tenter*」という記述が続いたとき、われわれは驚くであろうか。われわれが驚かないのは、このテキストが回想(*Mémoires*)である(したがって、語り手は常に背後に控えていて、いつでも介入することができる)ということを知っているためだけではないだろう。おそらく、ここに *histoire* と *discours* の本質的差異があるのである。これに反して、*histoire* のなかに混じった *discours* の要素は、すでに見た Balzac (*Gambara*) の一節からもわかるように、異質なもの、規則違反のようなものとして感じられる。言いかえれば、*discours* のなかに挿入された *histoire* は容易に *discours* の要素に変わるが、*histoire* のなかに挿入された *discours* はあくまでも *discours* としてとどまるということである(たとえば、*histoire* のなかの直接語法を考えてみるとよい)。これを語り手について見れば、「*la moindre observation générale, le moindre adjectif un peu plus que descriptif, la plus discrète comparaison, le plus modeste "peut-être", la plus inoffensive des articulations logiques*」、等々、語りの標識が一つでも物語に現われるならば、それはただちに *histoire* を *discours* に変え、語り手を出現させるということである。

これに対して Kuroda (1975, p. 293, note 1) は、物語が《部分的に》一人の語り手によって語られうることは認める。つまり、物語のあるいくつかの文、文のあるいくつかの構成要素(たとえば、ある名詞を修飾する節)を種々の語り手のものとすることはできる。しかし、物語全体を一人(または数人)の語り手に帰することはできないという。Kuroda のこの *théorie poétique de la narration* は単に全知の語り手の否定だけでなく、語り手そのものの否定にも通じる可能性を含むように思われるが、目下のところこれ以上の説明は与えられていない。

いずれにせよ、対立するこの二つの見解について結論を下すのは尚早であろう。そのためには稿を改めるとともに、語りの標識をさらに詳しく検討することが必要である。ただ、一つだけ言えるように思われることは、*multi-consciousness theory* (Kuroda, 1973) にせよ、《unique narrator》の否定 (Banfield, 1973) にせよ、その出発点となっている語り手の無標識性が、実際に物語のなかで実現される可能性は皆無に近いのではないかということである。私見によれば、全知の語り手であれ、総括的な語り手であれ、語り手の否定は、無標識性によってではなく、逆に標識の多さによって達成され、語り手の統一性は語りの標識の多様性によって崩壊することになるだろう。

Références

- Banfield, A. (1973): «Narrative style and the grammar of direct and indirect speech», in *Foundations of Language*, 10.
- Barthes, R. (1966): «Introduction à l'analyse structurale des récits», in *Communications*, 8.
- Benveniste, E. (1966): *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard.
- Benveniste, E. (1974): *Problèmes de linguistique générale II*, Gallimard.
- Bruneau, J. (1976): «La présence de Flaubert dans *L'Education sentimentale*», in *Langage de Flaubert*, Lettres Modernes.
- Cohn, D. (1966): «Narrated monologue: a definition of fictional style», in *Comparative Literature*, 2.
- Genette, G. (1966): «Frontières du récit», in *Communications*, 8.
- Genette, G. (1972): *Figures III*, Seuil.
- Kuroda, S.-Y. (1973): «Where Epistemology, Style, and Grammar meet: a Case Study from Japanese», in S. Anderson and P. Kiparsky (eds): *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston.
- Kuroda, S.-Y. (1975): «Réflexions sur les fondements de la théorie de la narra-

- tion », in J. Kristeva, J.-C. Milner, N. Ruwet (éd): *Langue, discours, société. Pour Émile Benveniste*, Seuil.
- Ross, J. R. (1970): « On declarative sentences », in R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds): *Readings in Transformational Grammar*, Ginn.
- Todorov, T. (1966): « Les catégories du récit littéraire », in *Communications*, 8.
- Todorov, T. (1967): *Littérature et signification*, Larousse.
- Todorov, T. (1968): *Poétique*, Seuil (coll. « Points »).
- Todorov, T. et Ducrot, O. (1972): *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Seuil.
- Verschoor, J. A. (1959): *Etude de grammaire historique et de style sur le style direct et les styles indirects en français*, Sorbonne.
- Vitoux, P. (1975): « Le récit dans *The Ambassadors* », in *Poétique*, 24.